



「その時」の備えを万全に

6. 12白石市総合防災訓練



「救出救護訓練」
倒壊家屋の下敷きとなった人が救出

6月12日、市では昭和53年に発生した宮城県沖地震を教訓に、白石中学校を主会場とした総合防災訓練を実施しました。

今後20年以内に88%という高い確率で発生が予測される大規模地震に備え、消防関係者や警察、田町・南町自治会の皆さんなど約700人が参加して、本番さながらに訓練を実施しました。



幼年消防クラブ(南保育園児)による体験放水

地震情報の「空白地域」解消
これまで白石市は、気象庁や県が設置する震度計がないために、震度情報の空白地域となっていました。このほど、防災科学技術研究所(文部科学省所管)が市内に設置している研究用の強震計が更新され、5月26日から気象庁の震度情報公表対象に白石市が追加されました。今後は、テレビやラジオなどで市の震度が公表され、的確で迅速な地震災害への対応が可能になります。



防災科学技術研究所が設置している強震計(白石市亘理町地内)

ナイスショット? 連発
市民グラウンドゴルフ大会

5月22日、白石川緑地公園で第13回市民グラウンドゴルフ大会が開催されました。



大会には、90歳の方を筆頭に約100名の市民が出席。深い芝や水たまりといった難コースに挑んだ出場者たちは、好プレーのたびに歓声をあげながら、心地よい汗を流しました。

各種目の優勝者(敬称略)
・団体の部 深谷南チーム
同チームと準優勝の寿山チームは大河原管内大会への出場権を獲得。
・シニアの部 伏見光雄

幻のラン復活への挑戦
小下倉地区で「セッコク」が開花

かつて市内に自生していたセッコク(ラン科の多年草)は、乱獲が原因で20年ほど前に絶滅しました。

平成7年から、柴田農林高自然科学部バイオ研究班では、セッコクの復活を目指し、小下倉地区に残っていたわずかなセッコクの株をバイオ技術で増殖。地元の皆さんと協力して、地区の切り立った崖などにセッコクの苗を植え付けてきました。

これまで500株あまりの苗を植え付けましたが、今年5月、初めて花を付けているのが発見されました。



町中を和紙のあかりで埋め尽くそう
白石和紙あかりプロジェクト

町おこしに取り組む市民有志「蔵富人」の皆さんが、白石和紙であかりを作り、町中を埋め尽くそうと企画した製作ワークショップが、今年も5月から7月にかけて壽丸屋敷で開催されています。



6月12日のワークショップでは、参加者が張り子型や木の枝を使った骨組み型のものなど、思い思いのあかりを製作していました。製作されたあかりは、8月11日の夏まつりの夜、壽丸屋敷で展示されるとのことです。ぜひご覧ください。

「ホタルの里」をみんなで守ろう
福岡小児童がホタルを放ちました



福岡小学校では、ホタルを守り育てる活動に取り組む学区内の「白石薬師堂ホタルの里を守る会」の協力のもと、ホタルの生態や生息環境を学び、その飼育に取り組んでいます。

6月14日、見事に成虫になったホタルを自然に帰そうと、同校の5・6年生児童95名が、1年間かけて育てたホタルの成虫6匹を福岡蔵本の「おがる石」付近に放ちました。

同地では、7月8日から12日の夜にかけて、守る会主催の「ホタル観察会」も開催される予定です。

文化の香りもかぐわしく
白石城で「香道の会」開催



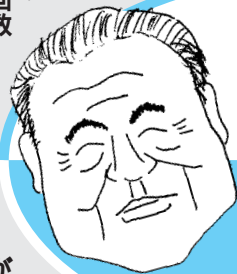
犬筥(犬をかたどった張り子の置物)

5月16日、白石城天守閣で「香道の会」が開催されました。

香席に先立ち、宮内庁御用達の方のご厚意で持参いただいた縁起物の犬筥(いぬばこ)に向かって、市制施行50周年にあたり、未来を担う子どもたちの健やかな成長と市民の幸せなどを願い、供香の儀式が行われました。

続いて参加者は、1階は志野流、2階は御家流とに分かれ、雅やかな香りの中、いにしえからの風流な遊びを楽しんでいました。

5月の末、私の留守に栃木県から学生時代の友人K君が、役所に訪ねて来た。「今日は仙台で松韻寮の会合があるから」と言っていて、帰ったという。松韻寮は、かつて東北大学第三教養部の寮であった。昭和二十七年のことである。学校で松韻寮の連中が、皆はれぼったい顔をしている。試験の真っ最中である。停電になって、最後の追い込みがきかなかつたと言った。K君は遊びの天才だった。毎日てらを着て、寮でころころしている。学校に行くよりも、通称トンベイこと、東北劇場に行く回数の方が多し。実は私もトンベイの常連



川井市長の
せせらぎトーク

「還らざる青春」

で、赤い風車、終着駅 禁じられた遊び、ライムライト、イブのすべて、哀愁、美女ありきくらいは、今でも覚えている。試験になった。一晩で詰め込もうにも、なんせ酒と映画で頭はかすんでいる。そこで彼は考えた。どうせドッペル(落第する)なら、仲間も一蓮托生だ。彼は、電気スタンドの線を引っ張り出して、プラスとマイナスをつなぎ、コンセントを差し込んで、布団をかぶって寝てしまった。当時のプレーカーは、ヒューズで安全策を講じていたから、あつという間にヒューズが飛んでしまった。試験の前の晩だから、寮中大騒ぎになった。寮長はじ

め幹部が集まって、これは、皆が一斉に電気を使いきるからだ。一夜漬けのせいで、一部屋二灯までに制限した。当時は、一人一部屋というのは夢のような話で、十畳一間に六人位詰め込まれていた。それでも二灯なら何と全員字が読めるだろうと、ヒューズを付け直したが、プラスとマイナスが一緒になっている。あつという間にヒューズが飛んでしまった。いよいよ一灯だと、一部屋一灯ということになって、今度こそと思つたら、飛んでしまつた。

せつば詰まった連中は、皆考えた。これはもはや非常手段である。ヒューズをやめて針金で繋いで、今度こそと、プレーカーを差し込んだところ、なんと電柱のトランスが火花を散らし、いかれてしまった。機転の回る奴はローソク買いに走つたが、時代が時代、品切れだった。もはや万事休すである。相当ドッペルした者もいたと思つた。

当然ドッペルはずだったK君は、睡眠